

フォーラム・セミナー報告

第11回 FDフォーラムを開催しました

9月6日、関西大学千里山キャンパスにおいて、第11回関西大学FDフォーラムを開催しました。今回のフォーラムは「大学教育再生加速プログラム（AP）」が採択されたことに鑑み、アクティブ・ラーニングの質を高めながら裾野を広げていくためにはどうしたらよいか、アクティブ・ラーニングの成果をどのように可視化すればよいか、生涯に亘って能動的な学習者（Lifelong Active Learner）を育むためにはどのような工夫や仕掛けが有効であるか、この三点をテーマに、神戸大学より近田政博氏、立命館大学より沖裕貴氏をお招きし、本学からは研究員の田上正範氏が登壇して、それぞれに貴重な知見やアイデアを開陳して頂きました。プログラムは近田・沖・田上の三氏による基調講演、同じく三氏によるパネルディスカッションの二部構成で進めました。

近田氏は「大学教職員にとってのアクティブ・ラーニング」というタイトルで鋭く先陣を切りました。アクティブ・ラーニングという点、ともすれば学生の学習態度や意欲あるいは手法にばかりにスポットライトが当てられるきらいがある、すなわち教師はアクティブ・ラーニングの機会を提供しているのに学生は少しもアクティブにならない、それは学生の側に問題があるのだ、もしくはアクティブ・ラーニングという手法には限界があるということだ、そのように捉えられがちだが、果たしてそうなのだろうか、鮮明に課題が提示されました。氏は大学生がアクティブ・ラーニングを好まないのはそれまでの「そつなく知識を吸収する学習」の習慣が身につけているため、そこに求められた出口の見える忍耐、手続きなどの馴染みのある事柄とは無縁の新たな学習形態に対して心理的な抵抗を持ってしまっからで

あると喝破し、これを克服するためにはアクティブ・ラーニングの意義が学生に伝わるように教職員自らがアクティブな姿勢や態度を示し、共に学習を楽しむばかりか、情熱や感動を確かに伝えることが不可欠であると、刺激的なご提案を頂きました。

沖氏は何故アクティブ・ラーニングには特別な成果指標が求められるのか、求められている割には確たる指標が作られていない理由は何なのか、そのような停滞した状況を克服するためにはどうしたらよいかについて、海外での取り組み事例、そしてご自身の実践例を盛り込みながら、実に示唆に富むお話をしてくださいました。一般に、授業科目の成果は「知識・理解」あるいは「技能・表現」など、比較的測定が可能で到達度によって測定されるが、その科目においてPBLなどの手法が用いられた場合、あるいは手法の用不用を問わずアクティブ・ラーニングの展開を目指す授業が実践された場合、「知識・理解」や「技能・表現」とは別に「関心・意欲」「態度」「思考・判断」などの評価が求められることになる、これらGeneric skillsは測定が困難な達成目標、あるいは向上目標であるため、アクティブ・ラーニングの成果指標はまだその確立を見ていない、まずはそのように我が国における現況の説明をされました。その上でこの克服を試みる海外の事例をいくつか紹介したのち、「真正な評価」を実施するためにはポートフォリオとパフォーマンスへの着眼・活用が不可欠であり、これを可能にするのがルーブリックであると、ご自身の実践例を引き合いに出されながら、混迷している多くの大学教員にとって希望を感じられる活路をお示し下さいました。

田上氏は「ジェネリックスキルを培う新しいアクティブ・ラーニング」という演目で、新しいアクティブ・

日時：9月6日（土）13：00～17：30
場所：第2学舎2号館 C304教室

ラーニングの地平を開き、これを豊かにしていく「ハーバード流交渉学」の可能性についてご紹介いただきました。交渉学とは



FDフォーラムの様子

契約を成立させるためのスキルやナレッジを提供するものではなく、複数の当事者間の利害などを巡る衝突あるいは対立を克服するプロセスの実例を分析し、理論パターンを抽出した実践的方法論であり、この学問によって交渉を設計するための分析力、交渉を効果的に展開するためのコミュニケーション力、交渉の大詰めに必要な意思決定力が涵養されるとの解説は、ここに提供される実践的な学習プログラムがジェネリックスキルを培うのにきわめて有効なものであると確信させられるものでした。氏は交渉学の意義や価値についてお話をされるだけでなく、オーディエンスにそのイメージを伝えるために、ロールシミュレーションを柱とした有職者と学生による「交渉学ワークショップ」（本年5月10日実施）の様子を紹介したり、講演の中で交渉学のエッセンスを少し盛り込んだシーンを再現したりするなど、豊かなコミュニケーション力の片鱗もお示し下さいました。

このように益ある講演ののちの第二部のパネルディスカッションは当然のことながら大いに盛り上がり、オーディエンスの方々からも好評評価を頂きました。なお、講演会ならびにパネルディスカッションについては動画の配信を検討中です。（教育推進部 / 教育開発支援副センター長 三浦真琴）

日常的FD懇話会を開催しました

7月24日、第8回日常的FD懇話会「反転授業の理念と実際」を開催しました。近年、高等教育でも注目されている「反転授業」について、ご紹介いたします。

●反転授業とは

20世紀後半にアメリカで生まれ、草の根で広まった反転授業は、説明中心の講義などをeラーニング化することで学習者に事前学習を促し、対面授業では理解の促進や定着を図る演習課題、または発展的な学習内容を扱う授業形態です。近年では、MOOC（Massive Open Online Courses、大規模公開オンライン講座）と結びついて新たな教育改革のキーワードとなりました。草の根で広まったその理由の1つは、反転授業を通じて、学習者の理解が格段と高まった事例がいくつか報告されたことにあります（Bergmann & Sams 2012, Fulton 2012, Khan 2012）。

●アクティブ・ラーニングと反転授業

反転授業は、一見、革新的な教育デザインのようにも見えますが実はそうではありません。他の教育方法と同様、授業担当者が実践の中で試行錯誤しながら少しずつ改善を繰り返してきた歴史があります。教育工学では、eラーニングと対面

授業を組み合わせたブレンド型学習の一形態として位置づけられていますが、その一方で、講義動画以外の教材を活用し、事前学習を促すことで対面授業のアクティブ・ラーニングを活性化させる教育方法もすでにいくつか存在しています。事実、効果が上がっている反転授業では、対面授業において学習者同士の学び合いや教え合いを基盤とするグループワークを導入するデザインがほとんどであり、そこで見られる学習者の活動は、まさにアクティブ・ラーニングのそれと同様のものです。つまり反転授業の高い成果には、アクティブ・ラーニングにおける効果も大きく含まれているといえます。

●反転授業の種類と実践

今現在の反転授業には、アクティブ・ラーニングを含むデザインが大きく分けて2つあります。

1つ目は〈完全習得学習型〉と言われている方法で、ある教育内容のレベルを受講者全員が達成することを目標に掲げ、事前学習の内容を対面授業のアクティブ・ラーニングで定着・発展させる方法です。2つ目のデザインは〈高次能力育成型〉です。1つ目の〈完全習得学習型〉では、事前学習の内容を、対面授業において繰り返し考えることで定着させることを達成目標に置かれてい

日時：7月24日（木）14：40～15：40
場所：第2学舎1号館 共通会議室

るが、〈高次能力育成型〉は、事前学習で得た知識を活用し、対面授業ではさらに発展的な活動を行うことを目的としています。その基盤となる知識や共通認識の構築については、その部分を動画化し、事前学習とすることで、対面授業でのアクティブ・ラーニングに多く時間が割けるという魅力があります。

●アクティブ・ラーニングを再考する

知識基盤社会の現代では求められる能力や知識のあり方も大きく変容しつつあります。固定された知識を早く正確に再生産するよりも、時代の変化に対応しつつ、自らの既存知識を新しい情報を結び付けて新たに再構築していく能力が求められるようになりました。個人の産物である〈わかったつもり〉を、他者との相互作用の中で揺らぎや躊躇を通じて、再度、自らの〈わかった〉を再構築していくプロセスは、まさに生涯学習にも通じる普遍的な学習モデルです。大学教育という大きなフレームの中で、反転授業を通じて現代に適した〈学び方を学ぶ〉ことは、学生にとっても大きなメリットがあります。反転授業で新たに注目されたアクティブ・ラーニングにおける知識の重要性は、今後、ますます大きくなることでしよう。

（教育推進部 森朋子）